

Wakayama University Tourism Update

Semiannual Newsletter of Tourism Education & Practice

WTU Spring/SUMMER 2025



Sharing Experiences

Contents – 目次 –

1. Reports – 和歌山大学観光学部生の国際 / 地域活動報告 –
2. Topics – 過去のイベントとニュース –
3. Future Events – 今後のイベント紹介 –

■ クロアチア留学を通して得た学び

～ Erasmus Plus 交換留学プログラム (クロアチア)

東 千尋さん (2025年3月学部卒業 / 福井工業大学附属福井高等学校 (福井県) 出身)



2023年9月から2024年2月までクロアチアのザグレブにあるVERN‘大学へ留学に行きました。大学で学ぶ中で興味を持った分野である「行動心理」や「経営」を学問として学ぶために、アントレプレナーシップ経済学やホテル経営学を強みにもつVERN‘大学への留学を以前から強く志望していました。

アントレプレナーシップやホテル経営学を中心に、他にも商品技術のホスピタリティやクロアチアの歴史から社会システムを学ぶ講義など計7つの科目を履修しました。講義では、頻りにディスカッションの時間が設けられ、自分の立場を明確に示し、表現することが求められました。特に、国際問題や政治、経済、歴史についての知識や理解に基づく意見を論理的に述べる必要があったため、日頃から新聞やニュースから得ていた知識が役に立つ場面が多々ありました。また、商品開発や起業内容を数回に渡ってプレゼンテーションを行う講義では、教授から毎回フィードバックとして、弱みや検討すべき点を指摘していただき、チームで意見を出し合いながらブラッシュアップを行いました。各分野における歴史や現状からの学びを元に、チームや教授と新たな解決策を見出す経験を通して、論理的に思考する力が養われたと感じています。3年次での留学であったため、観光学部での学びがベースにあったおかげで、自分がより専門的に学びたい分野を選択でき、レベルの高い内容にもついていくことができました。



生活面では、クロアチアは英語が公用語ではないため、買い物や交通機関の利用でさえもかなり苦労しました。現地では、Erasmus Student Network(ESN)の課外活動を通して留学生や現地の学生と交流を行いながらクロアチアでの生活のノウハウや、クロアチア語を学び、簡易的な会話を習得することができました。ほとんどがヨーロッパ出身の学生だったため、英語以外の言語を教え合ったり、休日にはEU圏内の国へ旅行したりと貴重な経験と多くの友達ことができました。また、日本クロアチア映画祭や日本人選手の活躍するサッカーチームの観戦など、クロアチアと日本の文化交流の場面にも参加でき、多くのクロアチアの方々から日本愛に溢れている様子にはとても驚きました。



学部や国を超えて学ぶことができる環境と多くの方のサポートのおかげで有意義な留学にすることができました。半年間の留学をしても4年間で卒業できたのは、初学年から授業計画を立て履修し、留学の機会を逃さなかったことにあります。苦労した面も含めて、クロアチア留学を通して得た学びや力は、卒業論文や就職活動に活かすことができました。今後もクロアチア留学での経験を糧にさらに成長していきたいです。

■ 留学体験レポート

～ Erasmus Plus 交換留学プログラム (クロアチア)

野口 芽生さん (学部4年生 / 開智高等学校 (和歌山県) 出身)

私は大学3年生の2023年9月から2024年2月末まで、クロアチアのヴェルン大学に留学し、観光学を学びました。貴重な経験を得ることができたため、この留学経験を「語学」「費用」「生活」「単位・卒業計画」の項目に分けてまとめたいと思います。

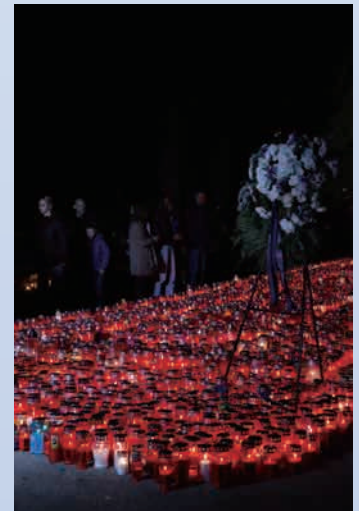
留学前の私の語学力は、英語で相手の言いたいことがなんとなくわかる程度で、スピーキング力はほとんどありませんでした。そのため、ヴェルン大学で、英語で行われる授業を受けた際には非常に困り、授業後には先生やクラスメイトに質問をして、何とか授業に追いつくよう努力しました。その結果、帰国後に受けた TOEIC では 200 点近く点数が上がりました。思うように話せず本当に辛い時期も多かったため、留学前にリスニングとスピーキング力をできるだけ高めておくことを強くお勧めします。

費用に関しては、ありがたいことに、エラスムスプラスから資金助成を受けることができました。飛行機代や毎月の家賃、生活費として日本円で約 70 万円の返還不要の奨学金をいただいたので、実際に自分で負担したのは娯楽費だけでした。おかげで、経済的な負担が大きく軽減され、安心して留学生活を送ることができました。

現地での暮らしについては、同じく観光学部から留学プログラムに参加した学生と二人でアパートを借りて生活をしました。留学前は一人暮らしの経験がなかったため、異国の地での生活は慣れるまで苦労しました。特に、現地の警察署で滞在許可を申請する際には、大家さんや大学の先生が必要な書類の用意を手伝ってくれたおかげで、無事に許可証を取得することができました。こうした経験は、今では貴重な思い出として心に残っています。

次に交換留学で単位を取得するためには、事前に和歌山大学に申請をする必要があります。また、交換留学で取得できる単位数は非常に少ないため、和歌山大学でしっかりと単位を取得してから留学に行くことが重要です。私の卒業計画については、公務員試験のための準備と留学の兼ね合いを考慮し、3年と4年の間に一年間休学をしました。最初は休学が就職活動の際に不利になるのではないかと不安がありました。先輩や進路指導の先生に相談し、休学の目的や休学中の計画が明確になり不安が軽減されました。もし同じような悩みがある場合は、周りに相談することをお勧めします。休学中は、試験に向けて準備をする時間的余裕ができたので良い選択だったと思っています。

最後にクロアチア留学を通して、異国に住むという不安や語学面での苦労もたくさんありましたが、クラスメイトとお茶をする時間や、旅先での新しい出会い、美しい街での生活などすべてを通して私にとって非常に有意義な時間でした。このプログラムは先生のサポートも手厚く、長期留学が初めてでも参加しやすいと感じましたし、和歌山大学の観光学部には GP や GIP といった英語で観光を学ぶための環境が整っています。費用面や生活面では多くのサポートを受け、問題なく生活を続けることができました。今後、この経験を活かし、さらに成長していきたいと思っています。

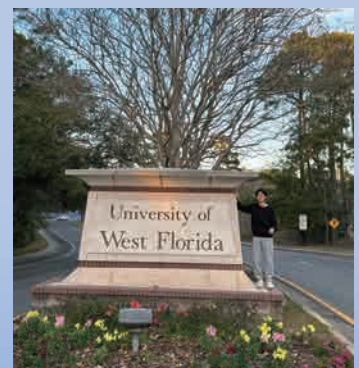


■ 自由の国から学ぶこと ～1年間のアメリカ留学を通して～

有田 翔栄さん（学部4年生／和歌山県立新宮高等学校出身）

2024年の1月から同年12月まで、アメリカのフロリダ州にある西フロリダ大学で交換留学を行いました。西フロリダ大学は、フロリダ州の最西端にあるペンサコーラという街に位置しており、白い砂でできたロングビーチが有名です。大学には観光学部も存在し、リゾート地ということもあるため、ホスピタリティ産業に注力しています。私は和歌山大学で観光学を専攻しており、また一度日本を離れて自分の力を外で試したいという思いもあったため、西フロリダ大学での留学を決意しました。

この一年間を通して、特に印象に残った気づきは主に二つあります。まず初めに、一年間の留学生活の中で、アメリカ人だけでなく他の国から来た方々と交流する



（次ページへつづく）



機会が多くありました。その経験を通してわかったことは、異文化を理解することの重要性です。私はこの留学期間中、常に他の文化を身近で体感し、理解しようと心がけていました。例えば、アメリカは銃社会で知られていますが、入国前はそれに対して怖いという印象しか持っていませんでした。しかし、一年間その社会の中で生活し、実際に射撃場で銃を経験することによって、アメリカにとって銃がどのような存在なのかを知ることができました。単なる怖いといった印象から、経験を基にした自分の意見に代わるということです。言い換えると、実際にその文化の中にのめりこみ、理解することで、中立の立場から物事を判断できるようになる、私はその瞬間に価値を見出しました。経験することが改めて重要だということに気づけたと思います。

次に私が一年間の留学生活で気づいたことは、アメリカは良くも悪くも自由な国であるということです。これはどういうことかということ、どの行動をとるのも個人の自由だが、すべて自分の責任が伴うということです。言葉では説明しづらいですが、アメリカでは人のしたいことを馬鹿にせずに尊重する風潮があるように感じました。それ自体は素晴らしいことですが、それと同時に、自分の言動に責任を持たないといけないという空気感も感じました。やりたいことはほぼ何でもできるアメリカですが、自分の身は常に自分で守らないといけないということを身に染みて学びました。そのおかげで、少なくとも自分の言動には責任感を持って生きようと思えました。

最後に、この留学を行うにあたって協力してくださった和歌山大学の方々、かなえてくれた両親、そして現地で仲良くしてくれた方々に感謝の意を述べたいです。ありがとうございました。この経験を決して無駄なものにせず、今後の自信の成長につなげたいです。

■ 色川地区 LPP での活動を通して

～地域連携プログラム (LPP)：中山間地域における地域ハブの役割と可能性を考える

(和歌山県東牟婁郡那智勝浦町)

坂本 七海さん (学部4年生/清教学園高等学校 (大阪府) 出身)



私は観光学部の地域連携プログラム【Local Partnership Program】(以下 LPP) を通じて、和歌山県那智勝浦町の中山間地域である色川地区で活動しています。2 回生から訪れ、今年度で 2 年目となりました。観光学を学ぶ学生として、また一人の若者として、多くの刺激や学びを得ることができました。

特に印象に残っているのは、一昨年 2023 年度の「全国棚田サミット」です。那智勝浦町・色川地区の棚田が開催地に選ばれたことを受け、私たち LPP 参加学生も運営をお手伝いしました。このサミットは、棚田地域の振興だけでなく、農業や田舎暮らしに興味のある方、移住を考えている方へ情報提供を行う場でもあります。有識者による講演だけでなく、現地での見学や住民との交流プログラムもありました。私たちはそうしたプログラムのサポートを通じて、全国の棚田保全に関わる人々や、田舎暮らしに関心のある方々と交流する機会を得ました。

この経験を通じて、「全国棚田サミット」の本質に迫ることができました。特に印象的だったのは、色川地区の方々から「発信したかったことややりたかったことが必ずしも実現できなかった」という声を聞いたことです。サミットが単なる観光イベントにとどまらず、地域の想いを正しく伝えられる場となるためには、主催者・市町村・棚田を持つ地域がしっかり意思疎通を図ることが重要だと感じました。また、イベントに参加した人の数だけ棚田や中山間地域に対する想いがあり、それぞれの人生観があるのだと気づきました。サミット期間中、色川地区の住民の方の家に宿泊させていただく機会がありました。その方は移住者であり、



「なぜ移住したのか」「現在どのような暮らしをしているのか」など貴重なお話を聞くことができました。私は和歌山県橋本市の出身で、比較的田舎といわれる地域で育ちましたが、それでも中山間地域へ移住する方に対しては「なぜ？」という疑問がありました。しかし、話を聞くうちに「便利さ」という一面的な基準では見えない地域の魅力や面白さを知り、多角的な視点を持つことの大切さを学びました。

さらに、これまでの活動を通して、就職活動を控える中で、私の将来に対する考え方も変わりました。これまでは「企業に就職し、都会で働く」という進路を当然のように考えていましたが、移住された方々のお話を聞く中で「興味のあることを仕事にする」「新しいことに挑戦する」という選択肢にも目を向けるようになりました。そして、それは色川地区のような中山間地域だけでなく、自分が生まれ育った橋本市に対しても同じように感じるようになりました。地元を改めて見つめ直し、地域の課題や魅力を知ること、自分にも何かできることがあるのではないかなと思うようになったのです。

LPP 活動を通じて、地域と深く関わることの面白さを知り、それが自分の生き方や価値観に影響を与えることを実感しました。私のこれからの人生をどのように歩んでいくのか、地元と色川地区での学びを活かしながら、しっかり向き合っ

■ 地域の魅力を活かしたイベント開発

～地域連携プログラム（LPP）：雑賀崎の地域資源の情報発信と空き家の利活用

（和歌山県和歌山市雑賀崎）

澤村 佳歩さん（学部3年生／大阪府立岸和田高等学校出身）

寺井 瑛音さん（学部3年生／和歌山県立星林高等学校出身）

新里 海織さん（学部3年生／沖縄県立那覇国際高等学校出身）

私たち雑賀崎 LPP は、和歌山市にある漁村、雑賀崎（さいかざき）をフィールドとして、2022 年度より、学生主導で活動しています。今年度は空き家の利活用と SNS での情報発信を主な活動目標に据え、様々な活動を行ってきました。昨年度に参加させていただいた和歌山市主導の空き家ワークショップや地元 NPO である「雑賀崎ポッセ」さんとの協働などを通じて、当初目的としていた空き家の所有・リノベーションなどには大きな課題があると認識しました。そこで空き家利活用の第一歩として、住民の当 LPP への認識や理解を深めることを目的とし、様々なイベントに参加・企画することから始めようと考えました。その中の一つとして LPP メンバーの一人が発案してくれたのが雑賀崎で「ロゲイニング」を行うというものでした。「ロゲイニング」とは、コンパスと地図を用いて、地図に示されたチェックポイントを巡りポイントを集め、最終特典を競い合うという競技性のあるイベントです。雑賀崎は細く入り組んだ路地が特徴であり、迷路のような構造になっているため、街中を歩き回る「ロゲイニング」に適していると考え、実際に実施してみました。

ロゲイニングの開催に向け、7月21日にチェックポイントの候補を LPP メンバーで探索しに行きました。この探索を通じて、綺麗な景色や地域の方の生活の様子など様々な雑賀崎の魅力を知ることができました。特に印象的だったのは、名前がつかない場所にたくさん魅力が存在するということです。普段旅行をする時はつつい名前があり有名な場所ばかりに目が行きますが、実際には名所以外ところにも多くのまちの魅力があることにこの探索で気づくことができました。一方、実際に街を歩くと路地と住宅の距離が近く、住宅付近の写真を撮ることで、住民の方に騒音やプライバシーの侵害などの悪影響を与える可能性があることにも気がつきました。探索で気付いた点を活かし、チェックポイントの点数決めで



（次ページへつづく）



はチェックポイントが偏って参加者が一箇所に集中しないように、また階段でのグリコやレモンの丘の鐘を鳴らすなどのアクションをして追加ポイントを得るアクションポイントの作成では、住民の方とじゃんけんをするなど地域との関わりを作れるように工夫しました。

第1回は10月6日に開催しましたが、広報期間が短かったこともあり、ほとんどLPPメンバーのみでの実施となりました。それでも、協力して探検を行うことでメンバー同士の絆が深まり良い経験になったと思います。また、参加者からフィードバックをもらえただけでなく、雑賀崎を楽しむ様子をまとめた素敵な動画も作ってくれました。一方で、改善点も多く挙がりました。地域住民とロゲイニングを通じてどう関わるか、地図の見やすさを向上させること、参加者を増やす工夫、チェックポイントの得点設定の見直しなど、今後の課題が明確になりました。

12月7日に実施した第2回では、前回の反省を活かし、チェックポイントの配置や点数を見直したことで、難易度調整がうまくいきました。また、地図に番号を振るなどの工夫を加えたことで、初めての人でも分かりやすくなったと思います。さらに、ロゲイニング中やお昼休憩の時には、雑賀崎の飲食店で美味しい食事を楽しむことができ、参加者もLPPメンバーも満足度の高いイベントとなりました。雑賀崎をあまり知らない方にも、その魅力を知ってもらう良い機会になったと思います。

計2回の実施を通じて、ロゲイニングイベントの企画・運営に関する知識や経験を積むことができ、その楽しさと難しさの両方を実感しました。次回の開催はまだ決まっていますが、これまでの経験を活かしながら、「どうすればもっと雑賀崎の魅力を知ってもらえて、ファンになってもらえるか」を考えつつ、今後も活動を続けていきたいです！

■ 地域愛を育む「学び合いの場」づくりを目指して～「風の人」だからこそできることを探して～ ～地域連携プログラム（LPP）：地域塾による龍神村の資源を活かした山村活性化

(和歌山県田辺市)

宮下 咲良さん（学部3年生／飯田女子高等学校（長野県）出身）



私たちは「地域塾による龍神村の資源を活かした山村活性化」をテーマに、林業を通じた「学び合いの場」で子どもたちにふるさとのことをもっと好きになってもらうきっかけを作りたいと考え、活動を行っています。一昨年度までの3年間、林業LPPとして『「林業×地域」の再発見による地域将来ビジョン策定とシナリオプランニング』というテーマのもと活動を行ってきました。活動の中で龍神中学校に訪問し、中学生にヒアリングを行った結果、「地元は好きだが、仕事がないから地元を離れるしかない」「地域内で稼ぐには？」といった声が聞かれました。このような声を受けて、子どもたちの地域愛と、地域への帰着を結び付けるためには、龍神の魅力や林業という地域産業について、世代を超えて語り合い、学び合う機会が鍵となるのではないかと考えました。この「地域塾構想」を実現したいという想いから昨年度新たにL活として再始動することになりました。



地域塾構想についてお話をいただいた結果、村内各種団体の代表や30～40歳代中心の若手メンバーで構成される龍の里づくり委員会の皆さんが受入団体を引き受けてくださることとなり、昨年度11月よりL活として正式に活動を再開、同月に龍神村にて開催された翔龍祭にスタッフとして参加させていただきました。私たちは、「組んで楽しむ 木育ジャングルジム」のコーナーで、参加者の子どもたちのお手伝いをしました。最初はスタッフや保護者の方の手を借りて杭を打っていた子どもたちが、どんだんのめり込んでいく姿を見てやりがいを感じました。

一昨年度までの活動では、木材市場や実際の山林を中心にフィールドワークを実施していたため、翔龍祭の参加を通してこれまでは顔を合わせる機会が少なかった大勢の龍神村の住民の方々と交流をすることができました。

昨年度の活動を通して、受入団体の龍の里づくり委員会の皆さんをはじめとした龍神村地域の方々との関係性を深めることができました。一方で「地域塾構想」についてはまだまだ私たち学生の中でもビジョンが定まっていないこともあり、

実現に向けて地域塾の中身を練り上げていく必要があると実感しています。誰をターゲットにするか、どんなコンセプトを設定するか、どのような学びを参加者に提供できるかなど、課題は山積みです。しかし「次世代に残したい産業や地域の姿とは何か」龍神地域の皆さんの想いを汲み取りながら、地域塾を実現させたいと思います。

私たちのような学生は、地域の外から地域に対する新たなまなざしやアイデアを運んでくる「風の人」とたとえられます。私たちが地域塾構想を通して期待する龍神村の未来図は、住民の方からすれば現実離れしたものなのかもしれません。それでも、私たちの活動や学生と地域の方々・子どもたちの交流が龍神村の未来に向けて力となるような風を吹かせられるのであれば、メンバー一丸となって様々な課題に挑戦していきたいです。



■ 棚田や集落を守り継ぐために

～地域連携プログラム（LPP）：学生との協働による棚田保全・集落支援活動（沼地区）

（和歌山県有田郡有田川町）

北岡 さつきさん（学部3年生／帝塚山学院泉ヶ丘高等学校（大阪府）出身）

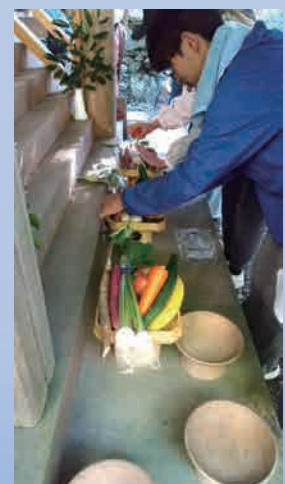
私たち有田川町 LPP は、地域の方々と学生との協働によって、棚田の保全及びその基盤となる集落の活性化に向けた取り組みを継続的に支援することを目的として活動しています。

有田川町沼地区の棚田は、棚田の枚数や面積が有田川町のなかでも随一の規模を誇る広大な棚田です。しかしながら、高齢化や人口減少によりその維持が難しくなっています。そこで、当プログラムでは学生がその棚田の一ヶ所をお借りして、田植えから稲刈り、精米作業までの一連の流れを担い、微力ながらも棚田の景観の維持に貢献しています。横幅が狭い棚田では重機が入らず、田植えから稲刈りまですべて手作業で行わなければなりません。これは想像以上に大変な作業ですが、棚田や集落の歴史についてお聞きしながら農作業を行い、私自身もその一端を担っていることを、身をもって実感する貴重な機会です。

また、当 LPP の重要な活動の一つには、棚田を支える地域住民の方々の生活や、棚田に根付く文化の継承を支援するというものがあります。地域住民の方々は、自身の農作業で手一杯であるにもかかわらず、日々棚田の管理をしてくださっています。また当地区では、高齢化により山椒収穫や集落清掃、獣害柵の点検等の負担が増加しています。そこで、この LPP では、日頃の感謝を込めてこれらを支援することで、地域の方々の負担を軽減し、側面的に棚田の維持を支えています。また、当プログラムでは、沼地区で行われる祭りの支援を行っています。これらの行事は、棚田に根付く貴重な文化です。今年度も、沼地区の氏神様や祭りの作法について地域の方々にやさしく教えていただきながら、沼地区の農村文化について理解を深め、継承できたことをうれしく感じています。

このように、有田川町 LPP は棚田だけでなく、そこに根付く文化や集落の維持にも携わり、棚田や集落を守り継ぐために尽力してきました。しかしながら、「支援」を重視するあまり、「活性化」に対する活動が不十分であるという問題があります。これは、当地区では高齢化や人口減少が深刻化しており、地域のキャパシティを考慮しなければならないという点で、大変難しい課題です。しかし、地域の方々が棚田や集落をもっと良くしていきたいと熱意を伝えてくださり、今後は「活性化」にも注力していきたいと強く感じています。

最後になりましたが、有田川町 LPP は、学生が地域住民の一員として地域と密接に関りながら活動する、やりがいのあるプログラムです。私たちは、貴重な棚田や文化、それを支える集落全体を守り継ぎ、それらをより良いものとして後世へつなげていけるよう、これからも活動を続けていきます。



■ Global Intensive Project (GIP) - Global Learning Activity :

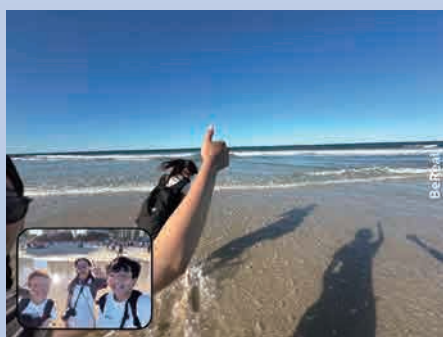
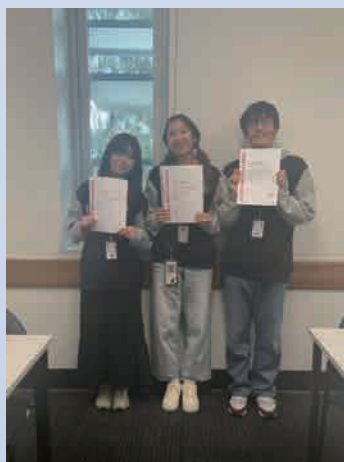
～ Intensive English Learning in Australia

(Griffith University, Griffith English Language Institute (GELI))

田中 あゆ花さん (学部3年生/大阪府立生野高等学校出身)

佐坂 なぎささん (学部3年生/兵庫県立柏原高等学校出身)

松本 瑛二さん (学部2年生/石川県立野々市明倫高等学校出身)



私たちはオーストラリア・クイーンズランド州にあるゴールドコーストで、5週間の語学研修を体験しました。現地ではグリフィス大学付属の語学学校に通い、英語を学びました。学校では、学生の語学レベルに合わせたクラス分けが行われており、自分に合ったレベルの授業を受けられます。ペアワークやグループディスカッションが多く取り入れられていたため、英語で話す機会が豊富にあり、Speaking力を伸ばす良いきっかけとなりました。授業内容は4技能すべてを強化するものでしたが、とりわけこの語学学校ではWritingに力を入れており、特にパラグラフライティングを重点的に学ぶことができました。また、授業を通じて多国籍の学生たちと交流し、異なる考え方や価値観に触れる機会もありました。授業中は間違いを恐れず積極的に発言し、疑問点はどんどん質問することで、自分の英語力を高める鍵となると実感し、それを実践しました。さらに、グリフィス大学主催のアクティビティも豊富で、BBQやおしゃべり会、休日のエクスカッションなどを通じて他クラスの留学生とも交流する機会がありました。自分から積極的に情報を収集し、参加したことで多くの人々と知り合うことができました。

私たちの学校生活は、午前9時から午後1時半まで授業を受け、その後は自由時間でした。その時間には学校主催のビーチバレーやティーパーティーに参加しました。また、アクティビティがない日には学校周辺のビーチへ出かけたり、ショッピングや公園で散歩したり、街のカフェ巡りをするなどをして、できるだけ充実した時間を過ごすように心がけました。留学中は公共交通機関が試験的に1回50セント(約50円)で利用できたため、ゴールドコースト内の移動が非常に便利でした。ゴールドコーストの名にふさわしい美しい海岸線は、時を忘れるほど魅力的でした。休日には少し足を伸ばしてブリスベンを訪れたり、毎年開催される「ゴールドコースト・エア・ショー」で飛行機を観覧したり、郊外のテーマパークへ行ったりと、観光も楽しみました。日本とは異なる風景や雰囲気、文化に驚きつつも、それに順応していくプロセス自体が楽しいと感じる日々でした。

滞在先のホストファミリーも私たちが温かく迎えてくれました。ある学生の例を挙げると、ホストファミリーはお母さんと二人の息子、そして猫の家族構成で、家族の一員のように感じられる環境でした。最初は緊張や英語への不慣れもあり、なかなか話せませんでした。ホストファミリーがゆっくりと分かりやすい英語で積極的に話しかけてくれたおかげで、徐々に英語を話す楽しさを実感できるようになりました。誕生日に外食に連れて行ってきて、誕生日パーティーを開い

てくれたことが良い思い出です。最終日には、手作りピザパーティーをして、食後は一緒にドラマを見たり、ゲームをしたりと、最後まで心温まる家族の時間を過ごしました。

このGIPプログラムを通じて、特に感じた成長は積極性が高まったことです。授業中は失敗や間違いを恐れることなく、積極的に発言できるようになり、その結果先生やクラスメイトとも深く関わり合うことができました。私たちは「毎日1枚、現地の人と写真を撮る」という目標を掲げて行動し、多くの地元の人々と会話を交わす機会を作りました。その中でオーストラリアの文化や習慣を肌で感じることができました。学習面では、特にWritingの向上を実感しました。授業でライティングスキルを基礎から詳しく学ぶことができたからです。加えて、毎日英語に触れる生活を送ったことで、ListeningやSpeakingも着実に上達したと感じます。オーストラリアでの5週間の留学という決断は勇気が必要でしたが、それ以上に多くの学びを得ることができ、非常に有意義な時間となりました。

■ PATA の活動を通して学んだこと ～大学での学びを生きた経験にするために～

PATA 和歌山大学学生支部

宮下 咲良さん (学部3年生/飯田女子高等学校 (長野県) 出身)

井上 紗菜さん (学部2年生/和歌山県立星林高等学校出身)

船越 宙さん (学部2年生/兵庫県立明石城西高等学校出身)

タイに本部を置く Pacific Asia Travel Association (太平洋アジア観光協会)、通称 PATA では旅行業界の人材育成を目的として学生支部の設立を促進しており、PATA 和歌山大学学生支部は 2016 年に発足しました。学生同士の学び合いから観光学を深掘りするとともに、メンバーが自ら企画した企業講演会・企業訪問を通して「観光業界の今」を知り、将来の自分がどのように観光に携わりたいか考える場を目指しています。

2024 年 9 月には World Tourism Day (世界観光の日) のテーマ、「観光と平和」に合わせてフィールドワークを実施しました。私たちは国際交流と信仰という 2 つに焦点を当て、串本町にあるトルコ記念館と那智勝浦町の熊野那智大社を訪れました。

トルコ記念館では 1890 年にトルコのエルトゥールル号が難破した際、串本の方が救助活動を行ったこと、またその事故から続く日本とトルコの深い友好関係について学ぶことができました。来館者が自由に記入できるメモ帳が置かれてありました。そこには、トルコ語で書かれた多くのコメントがあり、歴史上の出来事が、現在の観光にも影響をもたらしているのだと実感しました。

熊野那智大社では、神社の始まりや、大社を訪れる観光客などについて神職の方のお話を伺いました。魅力的な観光地として海外から多くの観光客が訪れている熊野本宮大社ですが、一番大切なことは変わらずご奉仕することであるという強い思いを感じました。平和的で深い絆が生んだ観光、日本の美しい信仰が生んだ観光など、観光と平和には様々な関わりがあることを学ぶことができたフィールドワークでした。

1 月には浦島観光ホテル株式会社代表取締役社長の松下哲也様を講師にお招きし、学部生を対象とした企業講演会を主催しました。講演会の準備にあたっては、企業の方とのメールやオンライン会議でのやり取りが初めての経験であったため、戸惑いました。1 年生のうちからメールのマナーなどを学ぶことができたことは良い経験になりました。また、講演会では地域活性化の本質や宿泊産業の在り方を学ぶことができました。そして、松下様や社員の方々とお話を通して、大学生活の中では触れられない、事業者から地域に対するまなざしやビジネスの考え方を学ぶことができました。この経験を基に、地域の観光資源の活用方法や魅力の伝え方などについて大学生活を通して考え、実践していきたいと思えます。

2025 年度の活動では、タイ政府観光庁大阪事務所並びに和歌山県庁の方々と連携し、和歌山県とタイという 2 つのフィールドを「グローバル」と「ローカル」両方の視点から捉え、持続可能な観光の発展のためには何が必要か学べるような活動を展開していきたいと考えています。授業での学びを観光の現場と結びつけ、学生が知識を実践的な経験へと発展させられる場にしたいです。

➔ 関連記事：<https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2025010700014/>



■ 現地での学びと発見 ～観光と文化を体感する GIP プログラム～

Global Intensive Project (GIP) - Global Learning Advanced :

～《2024 年度新設》ピレネー地域における観光

(スペイン (アラゴン州ウエスカ県、カタルーニャ州バルセロナ))



2025年3月14日から12日間、観光学部生6名がスペイン・アラゴン州を中心にピレネー地域の観光文化を学ぶフィールドワークに参加しました。今回が初開催となる本プログラムは、現地旅行会社 EnDestino 社との連携で実施され、観光学部生が歴史的観光資源や地域振興の取り組みを学ぶことを目的としています。学生は、現地コーディネーターと共にピレネー山脈の小さな村々を訪れ、地元の人々との交流を行いました。

ピレネー山麓の歴史と自然をめぐる旅

学生たちはバルセロナに到着後、ウエスカ県を拠点に観光資源を視察。スペインの地方都市ならではの文化や雰囲気を感じると共に、アラゴン地方を代表する歴史的建築や景勝地を訪問。観光資源としての価値だけでなく、環境保護とのバランスについて考えました。



地域の人々との交流と観光の可能性

アンソ村では、地元の NPO 法人 "Adopta Un Sendero" の若者たちと交流し、村のハイキングコース整備活動に参加。観光振興と環境保護の両立を目指す彼らの取り組みを通じて、地域資源の活用について実践的に学びました。また、フランス国境に近いカンフランクでは、歴史的な駅舎を改修した5つ星ホテル「Royal Hideaway Hotel」を見学。学生たちは観光資源を活かしたビジネスモデルや観光戦略に興味を持ったようです。



観光と地域振興の実践

ハカでは、市の観光局を訪問し、地域の観光プロモーションについてのレクチャーを受けました。観光の経済効果や持続可能な観光の取り組みなど、観光政策の実際を学びました。ピレネー山中にあるオルデサ国立公園では、広大な自然の中で、山の専門家であるガイドと共に4時間のハイキングを体験。山の麓にあるチーズ工房では、伝統的なチーズ作りの現場を見学し、山羊の放牧や地域に根付いた暮らしの営みについて理解を深めました。



スペインの美しい村々と都市観光の比較

「スペインで最も美しい村」に指定されている地域では、地元観光局の担当者から観光と地域活性化の関係について話を聞くことができました。最終目的地のバルセロナでは、地元ガイドとともに市内を散策し、地方観光と都市観光の違いを比較し、それぞれの魅力を考えました。

フィールドワークを通じて学ぶ観光

今回のフィールドワークを通じ、学生たちは地域の人々と交流しながら、持続可能な観光や地域資源の活用・保全について理解を深めたと同時に、自然とのかかわり方や旅のスタイルを見つめ直す機会にもなりました。観光を学ぶことは、地域の魅力を発信し活性化につなげるだけでなく、観光者の在り方を考えることでもあります。この経験が、学生たちの視野を広げ、今後の研究やキャリア選択に活かされることを期待します。

■ 受賞しました！～ 2024 年度 学生の表彰・受賞～

■「第 15 回関空発「学生と旅行会社でつくる」海外旅行」 グランプリ & 優秀賞

2024 年 6 月 29 日（土）、一般社団法人日本旅行業協会（通称 JATA）関西支部と関西エアポート株式会社 共催の第 15 回関空発「学生と旅行会社でつくる」海外旅行企画コンテストの最終審査会が実施され、「ロリィタ」をテーマにフランスのパリ、ナント旅行プランを企画した東ゼミがグランプリを、また、フランスのボルドーを舞台に“テロワール”を提案した竹田ゼミが優秀賞を受賞しました。

➡ 観光学部 HP 掲載ニュース記事

<https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2024070100024/>



■「観光学術学会第 13 回大会」学部学生発表奨励賞・優秀賞

2024 年 7 月 6 日（土）、7 日（日）に阪南大学にて観光学術学会第 13 回大会が開催され、学部学生ポスターセッションが行われ、遠藤ゼミの手塚有海さん（3 年生（当時））、松本頼憲さん（3 年生（当時））がそれぞれ優秀賞を受賞しました。

➡ 観光学部 HP 掲載ニュース記事

<https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2024071000040/>



■S カレ（Student Innovation College）2024：

「Z 世代のためのサラサーティ」プラン・テーマ 1 位 & 商品化決定！

2024 年 12 月 14 日（土）、福岡大学で開催された S カレ冬カンファレンス（冬カン）において、佐野ゼミの岩本芽育、岡本珠理、川口凜子、渡邊ひな（いずれも 3 年生（当時））が企画したレトロ風のパッケージデザインが、小林製薬株式会社の「Z 世代のためのサラサーティ」のテーマで、プラン・テーマ 1 位を受賞し、商品化が決定しました。

➡ 観光学部 HP 掲載ニュース記事

<https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2024121900016/>



■「Japan MICE Challenge 2025 in OKINAWA」 最優秀賞 & Innovative Bid 賞

2025 年 3 月 6 日（木）～7 日（金）、沖縄県で開催された「Japan MICE Challenge 2025 in OKINAWA」にて、観光学部・大学院観光学研究科専門職学位課程の学生チーム「Linkee」が最優秀賞ならびに Innovative Bid 賞（最も印象深いプレゼンに会場投票）を受賞しました。

➡ 観光学部 HP 掲載ニュース記事

<https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2025031000049/>



■「公益財団法人 関西交通経済研究センター 懸賞論文」奨励賞

「公益財団法人 関西交通経済研究センター」が主催する 2024 年度懸賞論文において、竹田ゼミ所属の浦野雅都、川合咲穂、坂本七海（いずれも 3 年生（当時））が奨励賞を受賞しました。

➡ 観光学部 HP 掲載ニュース記事

<https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2025030400055/>



■「和歌山大学観光学部長（研究科長）表彰」「和歌山大学観光学部 卒業時優秀学生表彰」 「卒業論文賞・修士論文賞・実践論文賞」

観光学部で実施している学生表彰は下記よりご覧ください。

➡ 観光学部 HP「学生生活」ページ：https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/student_life/

■ 2024 年度学位記・修了証書授与式が執り行われました



2025 年 3 月 22 日（土）、2024 年度学位記・修了証書授与式が執り行われ、観光学部生 126 名、大学院観光学研究科博士前期課程 6 名、専門職学位課程 10 名、博士後期課程 2 名が、それぞれ学士・修士・博士の学位を取得し、新たなステージへと旅立ちました。

和歌山ビッグホールでの学位記授与式、西 4 号館 T101 教室での各種表彰式（学部成績優秀者表彰、卒業論文賞表彰、修士論文賞表彰、実践論文賞表彰、ピアサポート表彰、学部長表彰・研究科長表彰、GP Completion Certificate 授与、観光学部教員表彰）が執り行われました。

卒業生・修了生皆様の今後のご活躍を期待しています。

Future Events - 今後のイベント紹介 -

■ 「LPP ガイダンス」「GIP ガイダンス」「GP2.0 ガイダンス（GP WEEK 2025）」を実施します！（学部内限定）



「地域連携プログラム（LPP）」「Global Intensive Project（GIP）」「Global Program（GP2.0）」のガイダンスを下記の通り開催します。

各プログラムの制度やスケジュール、参加申し込み方法などをお知らせします。関心のある学生は、必ず参加して、情報を集めておきましょう！

* LPP、GIP の各ガイダンスは、全学年が対象です。

GP2.0 ガイダンスは、2025 年度入学生が対象です。

* いずれのガイダンスも、事前の参加申し込みは不要です。

* 新入生ガイダンス／在学生ガイダンスで配布する

「観光実践教育サポートオフィスからのお知らせ」も、ご一読ください。

■ LPP ガイダンス：2025 年 4 月 16 日（水）5 限 @西 4 号館 T101 教室

■ GIP ガイダンス：2025 年 4 月 22 日（火）5 限 @西 4 号館 T101 教室

■ GP2.0 ガイダンス：2025 年 5 月 12 日（月）～ 16 日（金）

各日 12 時 30 分～ 13 時（5 日間、同じ内容で実施します。）

@観光プロジェクト演習室 2（西 4 号館 2 階 K208 室）

編集・発行

（2025 年 4 月発行）

和歌山大学 観光学部 観光実践教育サポートオフィス

〒640-8510 和歌山市栄谷 930 和歌山大学西 4 号館 K216 室、K116 室

TEL 073-457-8553 / E-mail tourism-er@ml.wakayama-u.ac.jp / URL <https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/>

* 本誌は Web ページからも閲覧できます→<https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/fuzoku/tourism-education-research/wtu.html>

